

要求水準における測度の因子分析と Inglis の 媒体動機づけ仮説の検討

一 谷 彊 森 中 惟 子

A Factor Analysis of Measures for the Level of Aspiration and
an Examination of Inglis' Mediation-Motivation Hypothesis

By

Tsuyoshi ICHITANI and Yuiko MORINAKA

Received May 31, 1967

Ⅰ. 歴 史 的 概 観

1. 要求水準に関する研究の起源と発展

要求水準の研究は、Lewin によって発展せしめられた緊張体系理論の一環として、人間の目標行動・意図的行動の力学を解明する手段として、Dembo の怒りの研究から出発して Hoppe によって初めてとりあげられた。

(1) Lewin の緊張体系理論

Lewin²⁴⁾ は、生活体に行動を喚起する動因となるものは、心理学的人の 内的領域におこる緊張 (tension) であり、この緊張が行動の生起に対してどのような機制を示すかについて、次のように考えた。まず、要求の目標になる環境の対象は、誘発性を発生するのであるが、この目標の誘因性の値は、人の緊張の強さに依存する。このことは、目標の示す誘発性は、要求に依存するもので、目標自体にそなわるものでないことを意味している。しかし、究極の目標に対する手段となる下位目標には、究極目標の誘発性が発生する。

環境に誘発性があらわれると、環境の力学的構造は、その誘発性に対する場の力を生ずることになる。この場の力は、環境の中の一定の位置にある人に対しても作用し、人にその目標に接近し、あるいは、退く行動を生じさせる。人に対する外部の場の力の効果の一例として、成功・失敗経験は、後の成績に著しい影響を与えることが考えられる。

Fojans は、3～4 歳児における成功と失敗の実験において、次の事実を見出している。すなわち、“性格学的にみて、どちらかといえば、消極な子どもが、成功によってむしろ活動的な行動に移っていき、性格学的に積極的な方の子どもが、失敗により、むしろ消極的な仕振りに萎縮していくことがある” (Lewin, 1935)²⁴⁾。

このように、人に対する外部の場の力としての成功・失敗経験は、人をその目標に接近させたり、回避させたりする。そこで、Lewin (1944)²⁵⁾ は、要求水準は、①成功の追求、②失敗の回避、③確率判断の認知という 3 つの要因によって決定されると考えた。

(2) Hoppe の研究

Hoppe (1930)²⁶⁾ は、個人の成功・失敗が、その態度にどのような影響を与えるかを分析した。Hoppe は、4 名の成人の被験者に種々のゲームに関してどの程度成功するかという主観的目標をた

てさせ、実際にゲームをやらせ、しかる後に、その目標に対する成功・失敗の体験を内省させた。このような主観的目標を、Lewin や Hoppe は要求水準 (level of aspiration) と名づけ、Hoppe は要求水準を次のように定義している。“与えられた課題における自分自身の未来の達成の期待、目標、あるいは要求”である。

表1 要求水準の変動 (Hoppe, 1930)²⁰⁾

	上 昇	下 降	不 変	中 止
成 功 後	52(32%)	0	5(3%)	18(11%)
失 敗 後	0	45(27%)	19(12%)	24(15%)

Hoppe の実験における4名の被験者は、9種のゲームを用いての36回の試行に際して、表1のような結果を示した。すなわち、初めに設定した要求水準より高い成績を得た場合 (成功)、次により高い水準を示す率は32%であり、失敗後に水準を低める率は27%であるがその逆はあらわれなかつた。

また、彼は、成功・失敗経験のおこるのは、あるせまい困難度の範囲に限られており、しかもそれは、本質的には当該人の能力の限度によって決定されることを明らかにしている。従って、あまりに難しい課題、または、あまりに易しい課題においては、成功経験も失敗経験も起らない。

かくして、彼は次のように結論した。成功・失敗経験の生起は、動作の結果の単純な機能ではなく、この結果と当該人のその時々要求水準との関係に依存し、動作の結果を自己自身の業績として自我に帰着させるか否かに依存している。そして、要求水準と、社会的な人としての個人の自我意識との間には密接な関係があり、顕著な、しかも根深い個人差がある。

要求水準研究に関する Hoppe の方法は、質的なものであり、彼の要求水準行動の評価は主観的になりやすいという欠点があった。

そこで、Frank は、Hoppe の方法よりも一層客観的、かつ、数量的方法によって、要求水準の研究を進歩させた。

(3) Frank の研究

Frank (1935)^{10,11)} は、要求水準を次のように客観的に定義している。すなわち、“課題の過去の成績を知っている個人が、その同じ課題において、次に到達しようとする未来の成績の水準”である。

そして彼は、要求水準と達成水準の間になされる直接の比較を可能にし、要求水準行動を評価するために、次の2つの理論得点を用いた。

① 目標差異得点 (Goal discrepancy score)

これは、前の成績と、次の目標との間の差で、目標が前の場合よりも高ければその値は正になり、低ければ負になる。

② 成功・失敗に対する典型的な反応の%得点

これは、成功後目標を高くし、失敗後低くするという反応の割合。

Frank は、ある課題における成績の高さの変更は、他の課題における要求水準の高さをかえさせることを明らかにし、要求水準と成績との関係は、個人によって大きな差異があり、しかも、信頼すべき一般的性格特性をあらわすと考えた。彼は、所与の場合における要求水準の高さは、

① 要求水準をできるだけ高く保とうとし、

② 失敗を避け、

③ 要求水準を将来の成績の現実的評価と緊密に一致させておこうとする

3傾向の合成であると述べている。

(4) Rotter の研究

Rotter (1942)^{80, 81, 82)} は、人格の研究法としての要求水準研究の方法学的側面を明らかにした。彼は、要求水準設定場面の反応は、準拠尺度 (reference scale) 等の状況的要因の性質と人格の要因によって決定されるとし、人格要因の性質を決定するためには、被験者によって誤解されないような教示 (instruction) すなわち、未来の目標の記述において、何が要求されているのかを明確にすることができるとする教示が必要であること、また、記述された目標と、達成された成績の間の差異のみならず、被験者の反応のあらゆる側面を調べることの必要性を説いている。また、要求水準研究の実験材料として必要な条件を挙げているが、これについては、本研究の方法の項で記述する。

要求水準は、その時の個人の生活空間の多くの側面に影響されるので、常に一定に保たれているわけではなく、過去の成功・失敗経験とか、目標設定場面の性質によって変化し、個人の個性によっても違いがみられる。

そこで、要求水準は、主に①環境要因（主として環境のストレスの変化）と②人格要因（主としてストレスに対する感受性の相違）によって決定されると考えられる。

次に、この各々の要因が要求水準設定におよぼす効果について実験された結果を順次述べていきたい。

2. ストレスの変化と要求水準に関する実験

(1) 準拠尺度 (reference scale) の効果との関係における実験

(i) Chapman and Volkman の実験

Chapman and Volkman (1939)⁷⁾ は、86名の学生に、文学的知識に関する多肢選択テストを課し、要求水準と準拠集団 (reference group) の社会的名声価値との間の関係を調べる実験を行なった。

被験者は、次の4つのグループに分けられた。

- ① 統制群（被験者自身の得点が示された。）
- ② 文学評論家の仮定グループとの比較において得点が与えられる被験者群
- ③ 学生の仮定グループとの比較において得点が与えられる被験者群
- ④ 労働者の仮定グループとの比較において得点が与えられる被験者群

その結果は、最も低い目標差異得点 (goal discrepancy score : G.D.) は、グループ④の場合に得られ、次にグループ②、グループ③の順で高くなり、グループ①が最も高い G.D. を示した。すなわち、要求水準と準拠集団の社会的名声価値との間に逆相関が認められた。そして、労働者グループとの比較は、被験者に自尊心への挑戦を生ぜしめ、その結果、要求水準が高くなるのだと考えた。

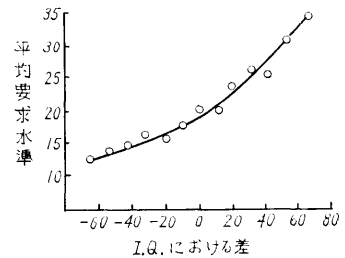
(ii) Gilinsky の実験

Gilinsky (1949)¹³⁾ は、要求水準は、個人の成績の比較グループからのへだたりに依存して変化することを予想して実験した。

被験者は、100名の大学生で、彼らは10名ずつ10のグループに分けられた。各グループは、各々比較グループの平均 I.Q. と語彙テストでの平均得点が話された。それから彼らは、自分自身の I.Q. の予想と比較グループと同じ語彙テストにおける要求水準を述べるように質問された。その結果は表2と図1からわかるように、要求水準は、被験者が比較グループとの間に認知する能力の差の程度に関連づけられた。その能力の差は、比較グループの I.Q. を被験者が自分自身について評価した I.Q. からひくことによってあらわされ、その値が正であれば、被験者が自分の能力を比較グループ以上に評価することを示し、負であれば、比較グループ以下に評価することを示している。そして、被験者と比較グループの間の能力の差が大きく認知されればされるほど、要求水準はグループの基準から大き

表2 相対的自己評価と要求水準 (Gilinsky, 1949)¹³⁾

I.Q.に関する自己 評価と比較グルー プの I.Q. との差	N	平均要求 水 準	要求水準の 標 準 偏 差
61～ 71	1	34.0	—
50～ 60	5	30.4	5.8
39～ 49	7	25.6	2.7
28～ 38	5	26.0	5.0
17～ 27	15	23.4	3.8
6～ 16	8	20.0	2.9
- 5～ 5	17	19.6	6.1
-16～- 6	4	17.2	3.3
-27～-17	15	15.2	5.6
-38～-28	5	16.2	8.2
-49～-39	10	13.8	4.8
-60～-50	7	12.9	2.2
-71～-61	1	12.0	—

図1 I.Q.における差の函数としての要求水準 (Gilinsky, 1949)¹³⁾

くかけはなれることが示されている。

(2) 社会的要因との関係における実験

(i) Gould の実験

Gould (1941)¹⁵⁾ は、6つの異なった課題に従

って、高い G.D. 得点と低い G.D. 得点を示す2つの両極端のグループに、81人の学生を分類した。そして、低い G.D. 得点を示すグループの者は、高い G.D. 得点を示すグループの者よりも、恵まれた経済的・社会的背景を持ち、後者のグループは、前者のグループよりも、社会的・経済的ストレスの大きい被験者であることを示した。

(3) 成功・失敗との関係における実験

(i) Bayton, J. A. and Whyte, Esther, C. の実験

Bayton と Whyte (1950)³⁾ は、次の3つの仮説に基づいて実験を行なっている。

① 要求水準、自信、成績には、被験者の直接経験が成功であったか、失敗であったかによって差がある。

② 要求水準、自信、成績は、被験者が成功あるいは失敗を経験する順序に影響される。

③ 最低要求水準は、自信の測度である。

被験者は、60名の男子の大学生で、彼らはランダムにグループAとグループBとに分けられ、課題は、ミネソタ検査 (Minnesota Rate of Manipulation Test) が用いられた。各被験者は、その課題の最高得点が告げられ、5分以内にできなかった場合には0点であることが話された。1回の練習の後、第1試行に入り、そのあとで、その時の得点が話され、次の要求水準がたずねられた。この時に告げられる得点は、どの被験者も同じであった。教示は、“あなたの得点は今度はどれ位だと思うか。もうそれ以下にはおちないだろうと思う得点を話して下さい”のように、現実水準と最低水準の両方を求めるようなものであった。このあとで、5段階に分けられた自信の水準が示され、自分が感じているものと一番よくあっている記述を番号で答えさせた。

作業は Session I と Session II とに分けられ (各々10試行)、Session I ではグループAは失敗条件下で、グループBは成功条件下で行なわれた。Session II では、この逆で行なわれた。そして2つの Session 間には短い休憩があった。

結 果：

現実水準と最低水準に関する平均 G.D. 得点と自信水準の平均の間の相関が求められたけれども、最低水準に関する G.D. 得点と自信の水準との間の相関は非常に低かったので、仮説③は支持されなかった。すなわち、最低水準は、自信の強さを測定するものではないことが明らかにされた。

次に、現実水準は、失敗条件下から成功条件下へ変化した場合およびその逆の場合、いずれにしても低下した。そして、最低水準は、失敗条件下から成功条件下へ変化する時には増加し、成功条件下から失敗条件下へ変化する時には減少した。このような成功・失敗という場面の変化は、自信の平均水準には影響がなかった。しかし、試行毎の自信の動きをみると、最初の経験が失敗である場合には、休憩後の第1試行目では自信は低下し、最初の経験が成功である場合には、休憩後の第1試行目では自信は上昇した。

また、2グループの成績を比較すると、グループBの方がすぐれていた。

考察：

現実水準は、最初の経験が成功であったか、失敗であったかに影響されず、場面的変化そのものに影響されるので、成功—失敗、失敗—成功いずれの場合にも低下する。これは、場面的変化が被験者を一層慎重にするためであると考えられた。

最低水準は、失敗—成功の場合に上昇し、成功—失敗の場合に減少しているが、これは、最低水準は、以前の経験に左右されず、現在の経験に固執するためであると考えられた。成績については、先に成功を経験する方が、失敗を先に経験する場合よりもすぐれているが、これは、失敗経験の情緒的付随物が作業能力を妨げるからであると考えられた。

以上により、仮説①②は確証され、③は否定された。

(ii) Sears の実験

Sears (1940)³³⁾ は、36名の学童を用いて、成功・失敗経験が読みと算数の課題における要求水準設定へおよぼす効果を研究し、失敗経験をもつ被験者は、G.D. 得点が大きく、また、その変動も大きい、前に成功経験をもつ被験者は、G.D. 得点が小さく、その変動も小さいことを示した。

(iii) Steisel and Cohen の実験

Steisel and Cohen (1951)³⁵⁾ は、失敗の程度の差が、要求水準におよぼす効果について実験を行なった。

被験者は40名の学生で、そのうち20名は弱い失敗グループに、あとの20名は、強い失敗グループに属した。課題は簡単な算数問題で、各試行において完成された問題の数について得点化された。その場合の制限時間は、失敗経験の強さを統制するためにいろいろに変えられた。強い失敗グループは、多くの問題を中止させられ、弱い失敗グループは、わずかの問題しか中止させられなかった。そして、各グループは成功経験が挿入されたが、それは同じ程度に統制されていた。この両グループの最初の失敗経験は、どちらも適度の失敗として与えられ、2回目の失敗経験から、強い失敗と弱い失敗に分けられた。そして、種々の程度の失敗経験の要求水準におよぼす効果が調べられた。その結果は次の通りである。

適度の失敗は、両グループの要求水準を同じように変動させたが、強い失敗グループは弱い失敗グループよりも要求水準の変動が大きかった。そして、強い失敗グループの G.D. 得点は、積極的で著しく高く、弱い失敗グループの G.D. 得点は相対的に安定していた。

また、失敗後の成績と、成功後の成績の比較によって、失敗後の成績の方がよくなることを示している。しかも、弱い失敗グループよりも、強い失敗グループの成績の方がすぐれ、この関係は継起的な失敗に関してさらに著しくなることが示された。このことは、失敗の作業への動機づけの効果を示している。

このように、要求水準は、失敗の程度に比例して減少するのではなく、ある点から後は、失敗の増加に伴って G.D. 得点が増加するということが示された。

3. 人格の変化と要求水準に関する実験

(1) Sears の実験

Sears (1941)³⁴⁾ は、成功・失敗条件下での児童の要求水準と人格変数の間の相関について研究した。そして、低くて正の G.D. 得点を示すグループ、すなわち、自分の成績よりは少し高く目標をおく者のグループは、社会的によく適応し、自信があり、融通がきき、自分の態度を明らかにすることができるが、高くて正の G.D. 得点および低くて負の G.D. 得点を示すグループ、すなわち、非現実的に高い目標をたてたり、成功の見積りを下げるグループは、社会的に非常に適応が悪く、緊張と不安が高いことを示している。

(2) Ax の実験

Ax (1947)²⁾ は、25名の被験者を“統合のよい人格”と“統合の悪い人格”という2つのグループに分け、統合の悪い人格のグループは、高くて正の G.D. 得点、あるいは、高くて負の G.D. 得点を示すことを発見している。

(3) Cohen の実験

Cohen (1954)⁸⁾ は、要求水準を決定する要因は、適応 (adequacy) と自己受容 (self-acceptance) の感情であると考え、人格のこれらの変数を得るためにロールシャッハ・テストを用いた。そして、それらの要因を要求水準に関連づけようとした。

被験者は、高血圧とか過度の緊張、喘息、精神神経症等の症状を持つ患者50名であった。各被験者は、ロールシャッハ・テストと Rotter aspiration board (Rotter によって提案された) が課され、ロールシャッハ・テストは、適応感情 (feeling of adequacy) と自己愛容の2つの変数に関して採点された。Rotter aspiration board での要求水準は、G.D. 得点であらわされ、それは次の3つの段階に分けられた。

- ① 高くて正の G.D. 得点
- ② 中間の G.D. 得点
- ③ 高くて負の G.D. 得点

この結果は、要求水準は適応感情とは相関がなかったが、自己愛容とは確かな相関があることを示した。そして、次のことが示された。すなわち、

① 非常に高い要求水準と、非常に低い要求水準とは、自己拒否または自己廃棄 (self-rejection) の高い程度に関連づけられる。

② 自己拒否の低い程度は、中間の高い要求水準と、中間の低い要求水準に関連づけられる。

③ 自己愛容は、低くて正、あるいは、低くて負の要求水準に関連づけられる。

自己拒否に関係のある非常に高い要求水準と、非常に低い要求水準の間には、曲線的相関があり、自己愛容の高い者だけが、低くて正、あるいは低くて負の要求水準を設定することが示され、この曲線的相関は、Holt (1946)¹⁹⁾ が述べているように、目標の記述が、達成しようとする動機の反映よりもむしろ防衛的な反応であるときに、要求水準設定の両極端は、防衛的な行動の両極端を示すためであると考えられた。

(4) Eysenck の実験

Eysenck (1947)⁹⁾ は、Jung の主張した内向型、外向型に関して、内向型は、現実から乖離し、その行動が主観性、情動性によって強く規定される傾向があるのに対して、外向型は現実に強く規定される傾向があるという主張を要求水準の実験によって検証しようとした。

内向型の被験者としてディスシミックな神経症患者 (dysthymics)、外向者の被験者として、ヒス

テリー患者 (hysterics) が選ばれた。

実験 I :

実験に用いられた機械は Punch Test で、これは記号置き換えテストとして使用された。被験者は、ディスシミック患者とヒステリー患者各1名ずつであった。彼らは2〜3試行の練習の後、そのテストでの定められた最高得点が告げられ、彼らがつぎに得るであろうと考える得点が質問され、テストが課される。そして、その時の得点についての彼ら自身の判断が求められ、その後で実際の得点が話された。次に再び、目標がたずねられる。このようにして10試行続けられ、毎回、要求水準得点、成績得点、判断得点が記録された。その結果は図2、3に示されている。この結果からわかるよ

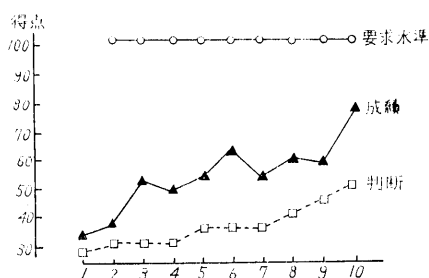


図2 ディスシミック患者の要求水準・成績・判断 (Eysenck, 1947)⁹⁾

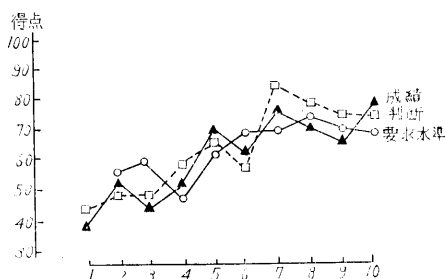


図3 ヒステリー患者の要求水準・成績・判断 (Eysenck, 1947)⁹⁾

うに、ディスシミック患者の要求水準得点は、成績得点よりもかなり高く、全くひとつの値にとどまっている。そして、判断得点は成績得点よりもかなり下で、成績得点による成功・失敗経験によってわずかに変動するだけである。これに対して、ヒステリー患者の要求水準得点と、判断得点は、成績得点に規則的に従属している。従って、ディスシミック患者は、現実からかけはなれ、全く主観的に要求水準を設定するのにに対して、ヒステリー患者は、現実在即して要求水準を設定することがわかる。以上の事実をもつと量的な変数によって明らかにするために次の実験が行なわれた。

実験 II :

Triple Tester (回転するドラムにつけられた螺旋形の軌道に、操縦器を操作してボールをのせていく作業) が用られ、被験者は、ヒステリー患者とディスシミック患者各々50名の男子であった。手続きは実験Iと同じである。そして、ヒステリー患者とディスシミック患者について、次の理論得点が求められた。

- ① 目標差異得点 (goal discrepancy score)—G.D.
- ② 判断差異得点 (judgement discrepancy score)—J.D.

被験者による成績評価と実際の成績との差で、この値が正のときは、自己の成績を過大評価する傾向を、負の場合は過小評価する傾向がある。

- ③ 感情差異得点 (affective discrepancy score)—Af.D.

目標差異得点と判断差異得点との差で、この値が大きい場合には、現実の成績に即して、目標設定ならびに成績評価を行なう傾向が少なく現実から乖離し、主観性、情動性によって影響される傾向が強いことを示す。

- ④ 柔軟性指数 (index of flexibility)—F.I.

成績の変動に対する要求水準の変動の比で、この値は、 $(\text{要求水準の変動数}) \times (\text{要求水準の値の異なる回数}) / (\text{成績の変動数}) \times (\text{成績の値の異なる回数})$

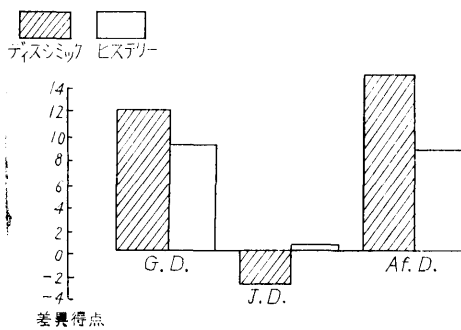


図4 G.D., J.D., Af.D. の比較 (Eysenck, 1947)⁹⁾

を、成績によってあらわされる現実 접촉させることができず、非常に高い目標をたて、自分の成績を非常に低く判断するのに対して、ヒステリー患者は、自分の目標と、判断を実際の成績に従って、高く見積ったり、低く見積ったりすると考えられる。Eysenck は、高くて正の G.D. 得点の設定は、自己尊重または自信 (self-esteem) を支える試みであり、高くて負の G.D. 得点の設定は、安心感 (security feeling) を保持する試みであると解釈した。また、ディスシミック患者の R.I. と F.I. は、ヒステリー患者よりも低かった。そして、成功経験に続いて、ヒステリー患者は要求水準をその時の81%、ディスシミック患者はその時の72%上げ、失敗経験のあとでは、ヒステリックスは要求水準をその時の56%、ディスシミックはその時の47%下げることが見出された。従って、ディスシミックの要求水準は成功や失敗によってあまり加減されず、高い厳格性または硬さ (rigidity) を示すが、ヒステリックスの要求水準は経験を通してよく変動することが認められる。

実験 III：

実験IIで求められた結果が、他のテストを用いたときにも同じように言えるかどうか、また、男子と女子について同じようにいえるかどうかを調べるために、34名の男子と35名の女子のヒステリックス、男女29名ずつのディスシミックが Punch Test によって実験Iと同じ方法で実験された。結果は実験IIの Triple Tester における発見を支持するものであった。そして、高い Af.D. 得点が異常人格特性に関連づけられることが見出された。つまり、男子については、高い Af.D. と不安定な人格 ($r_t = .53$)、怒りっぽくて疑い深い ($r_t = .61$)、強迫観念の特徴 ($r_t = .58$) との関係が見出され、女子については、反抗的で攻撃的 ($r_t = .45$)、強迫観念の特徴 ($r_t = .42$)、頭痛の訴え ($r_t = .44$)、自滅的感情 ($r_t = .46$) との関係が見出された。

(5) Himmelweit の実験

Himmelweit (1947)¹⁸⁾ は、神経症的傾向の弱者 (normal) と、強い者 (neurotic) の要求水準の比較およびディスシミックとヒステリックな神経症患者の要求水準の比較によって、彼らの人格の理解に接近しようとした。

実験 I：

正常群と神経症群との比較

被験者は、正常群が20名の男子と、33名の女子、神経症群が100の男子と、33名の女子であった。彼らは、年齢、社会的教育的背景に関しては統制された。実験材料には Triple Tester が用いられた。実験手続きは、Eysenck の実験の場合と同じであった。そして、要求水準行動の測度として、G.D., J.D., F.I., R.I. が求められた。その結果は表3のごとくである。この表から、各グループは、未来の成績を大きく見積り、過去の成績を小さく見積る傾向があることがわかる。そして、女子は、

⑤ 反応性指数 (index of responsiveness) — R.I.

成功後要求水準を上げ、失敗後それを下げる反応の回数で、典型的反応の傾向を示す。

その結果は、図4に示すように、G.D. は、ヒステリー患者よりもディスシミック患者の方が高く、J.D. はディスシミック患者の方が低い。そして、Af.D. については、ディスシミック患者はヒステリー患者の約2倍である。従って、ディスシミック患者は、主観性が高く、要求水準と判断

男子ほど未来の成績を大きく見積っていないが、過去の成績は、男子よりもかなり小さく見積る。また、女子は、男子よりも柔軟性が高く、自分達の目標を成績の変化にたやすく適応させることができることが示されている。

次に、正常群と神経症群が比較された。神経症群は正常群よりも未来の成績を大きく見積る程度が高く、過去の成績の見積りに関しては、正常群よりも小さく見積る程度が低いことが示された。また、F.I. と R.I. に関しては、正常群と神経症群の間に有意差がみとめられなかった。

表3 正常群と神経症群の要求水準 (Himmelweit, 1947)¹⁸⁾

		男 子 正常群	男 子 神経症群	女 子 正常群	女 子 神経症群
G. D.	M σ	+10.72 6.33	+10.38 14.32	+ 2.26 4.98	+ 6.15 6.62
J. D.	M σ	- 4.29 6.08	- 1.17 9.49	- 7.11 5.76	- 3.50 7.25
F. I.	M σ	4.25 0.71	4.32 1.83	5.69 0.54	5.73 1.02
R. I. (%)		45	49	48	49

表4 要求水準の測度間の相関 (Himmelweit, 1947)¹⁸⁾

	男 子 正 常 群	男 子 神 経 症 群	女 子 正 常 群	女 子 神 経 症 群
G. D. と J. D.	+0.591±0.130	-0.682±0.050	+0.391±0.151	-0.394±0.152
G. D. と R. I.	-0.251±0.201	-0.591±0.072	+0.132±0.103	-0.273±0.155
J. D. と R. I.	-0.531±0.151	+0.348±0.092	-0.222±0.173	+0.363±0.151

表4に示すように、要求水準の測度間の相関が求められた。正常群では G. D. と J. D. の間には正の相関が見られたが、神経症群の場合にはその相関は負であった。従って、正常群において、未来の成績を他の人よりも一層高く見積る者は、過去の成績を他の人ほど低く見積らない傾向があり、逆に、未来の成績を適度に高く見積る者は、過去の成績をかなり低く見積ることがわかる。また、神経症群では、未来の成績を他の人よりも一層高く見積る者は、同時に過去の成績をかなり低く見積り、未来の成績を適度に高く見積る者は、過去の成績をも適度に低く見積ることが示されている。

次に J.D. と R.I. との相関は、正常群では負で、神経症群では正であった。従って、正常群においては、過去の成績を低く見積る傾向は、成績の変化に対する目標の敏速な調節 (adjustment) に関係があるのに対して、神経症群においては、過去の成績を低く見積る傾向は、成功・失敗経験に対する型はずれの反応のより高い割合に関係があった。

以上の結果より、まず、すべての被験者が未来の成績を高く見積り、過去の成績を低く見積ることが明らかである。これは、要求水準は、単に知的評価だけではなく、よくしようという願望による見積りであり、自分の成績よりも幾分高い目標をたてることが精神的な構えになる一方、過去の成績を低く見積ることによって、前の“楽観的な見通し”に対して過度に補償するからであると考えた。

実験 II：

ヒステリックスとディスシミックスの比較

被験者は、34名の男子と、35名の女子のディスシミックス、および、29名の男子と、29名の女子のヒステリックスであった。課題は、Hollerith Punch の装置によって記号置き換えテストが用いられた。実験手続きは、実験 I の場合と同じであった。

結果は、G.D. に関してはディスシミックスの方がヒステリックスよりも高く、また女子は、男子よりも低かった。J.D. に関しては、ディスシミックスとヒステリックス、および、男子と子女とで有意差が示されなかった。

次に、ディスシミックスの F.I. は、ヒステリックスよりも有意に低かった。すなわち、ディスシ

ミックスの反応は、ヒステリックスの反応よりも有意に固定していた。R.I. に関しては差がなかった。

ディスミックスは、自分自身の能力を信じないで、あらゆる事態を挑戦と考えるのに対して、ヒステリックスは、あらゆる事態を自分の価値の挑戦と考えないから、テスト場面においてあまり努力しない。従って要求水準は、自我関与の程度によって影響されると考えられた。

実験 III：

実験IIの結果によるディスミックスとヒステリックスの要求水準行動の特徴的な反応は、彼らのモチベーションを増大することによって、一層強調されるであろうという仮説のもとに実験された。

被験者は22名の男子のディスミックスと20名の男子のヒステリックスであり、Triple Tester が使用された。実験Iと同じ方法で、10試行のテスト(1)が行なわれて、1週間の後、再びテスト(2)が行なわれた。テスト(2)が始められる前に、被験者は、テスト(2)での得点が、テスト(1)での彼らの最高得点よりも30点近く上まわったら、賞が与えられるであろうと話された。それから同じ方法でテスト(2)が進められた。

G.D., J.D., F.I., R.I. がそれぞれテスト(1)とテスト(2)に関して求められて、比較された。その結果は次のごとくであった。

- ① ディスミックスもヒステリックスも、テスト(2)で G.D. を上げた。
- ② テスト(2)では、ディスミックスは J.D. を下げ、ヒステリックスはこれを上げている。
- ③ テスト(2)では、ディスミックスの F.I. は低下したが、ヒステリックスのそれはかわらなかった。
- ④ R.I. は、テスト(1)とテスト(2)とで変化がなかった。

従って、賞の誘因が与えられた場合には、両グループとも、未来の成績を過大評価するようになることが認められる。そして、高い目標を設定することによって、不安、心配、自信喪失を生じ、それは、自分の成績を過小評価するように導く。従って、よくしようにすることに對して不安なディスミックスは、自分の実際の成績を過小評価するようになるのに対して、ヒステリックスは、自分の能力をすぐれていると考えているので、過去の成績を過小評価するよりも、むしろ、過大評価する傾向があることが見出された。また、ディスミックスは、増大されたモチベーションのもとでは、反応が一層硬くなるけれども、ヒステリックスはこの事態でも柔軟性のある反応を示した。

4. 要求水準に関する Inglis の媒体動機づけ仮説について

先に、ストレスの変化と要求水準に関する実験、人格の変化と要求水準に関する実験について、若干述べてきたが、Inglis, J. (1960)²³⁾ は、これらの実験の文献的考察から、要求水準の問題を媒体動機づけ仮説 (Mediation-Motivation Hypothesis) によって統合しようとして、ストレスおよび人格の変化と要求水準に関して仮説している。

Inglis の媒体動機づけ仮説は、Osgood, Berlyne, Morris, Brown 等の人間に関する動機づけの見解と関連がある。

Osgood (1952)²⁸⁾ は、“対象そのものではない刺激づけの型は、もし、それが有機体に媒体反応をおこさせるならば、それはその対象のサインである。そしてこれは、

- (a) その対象によってひき起された全行動のある断片部分であり、
- (b) 対象そのものでないものの刺激づけの型とその対象の刺激づけの型との以前の連合なしでは生じないところの反応を媒介するような明確な自己刺激づけをつくりだす。”

と述べている。

Berlyne (1954)⁴⁾ は、Osgood のこの考をつぎのような図式で示した。

$$\boxed{S} \longrightarrow r_m \cdots \cdots S_m \longrightarrow R_x$$

(S はサイン, r_m は媒介反応, R_x は外面的行動)

Morris (1946)²⁷⁾ は、象徴化 (symbolizing) の認知的 (cognitive) な面と、欲動的 (orectic) な面の両方を認める必要性を指摘した。そして、不安媒体に関する象徴化の過程の内容は重要であろう。Brown (1953)⁶⁾ は、不安動因と自己評価のような高度な動機との間の関係を次のように述べている。“特定の目標物に対する仮定された獲得動因の多くの動機づけの構成要素は、実際には、これらの目標がない場合に不満をもったり苦しんだり、不安になったりする、学習された傾向である。”

不安と社会化の間の関係は Mowrer によつて述べられ、人格変数の重要性は Eyrenck によって強調された。

Inglis²³⁾ は、これらの考えを基礎として、自己の理論を確立しようとした。彼は“人間の欲動的な行動の重要な部分は、媒体の操作に関連づけられ、ある実験データーは種々の程度のストレスのもとでの媒体の取扱いの個人差を説明するものである”と考え、ストレスに対処する方法に関心を持ち、個体自身が不安を作りだした内的反応に対して、個体は能動的な回避行動を始めると考えた。そして、あまりにも多量の回避が問題解決の道具を奪い、個体の適応力を減少させる一方、不十分な回避は、同様に不適応をおこすであろうと考えた。また、異なったストレス事態と、ストレスに対する感受性の個人差には交互作用が予想できると考えた。Inglis は、この考えを図5のように図示している。動因と効率との関係は従来示されてきたような逆U字型である。自己刺激を媒介する不安の回避は、問題解決の一種とみなされる。従って、ストレスと、ストレスの感受性に関係のある人格変数は、不安を媒介するものの回避を含む適当な“解決”に類似した効果をもっている。

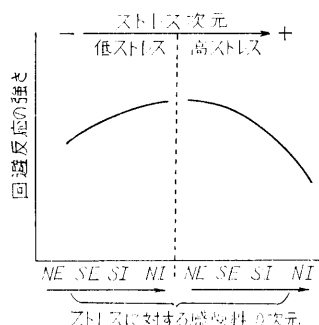


図5 Inglisの図式
(Inglis, 1960)²³⁾

Iverson and Reuder (1956)²³⁾ は、自我関与の程度と反応の効力との関係は、曲線的関係で、それは、動機づけの連続体を反映し、曲線の両極端で抑制あるいは分裂がおり、中央の近くで促進されたカーブを示すことを明らかにしている。

Inglis²³⁾ は、“動機づけの連続体”は、特殊な“社会的なストレス”または“社会化された不安物”の一つとみなし、これは順次神経症的外向性 (NE)、正常的外向性 (SE)、正常の内向性 (SI)、神経症的内向性 (NI) を含んだ合成の連続体に沿って存在するとみなされると仮定した。この場合の人格構造とは、Eysenck の提案した神経症の傾向 (neuroticism)、内向性—外向性 (introversion-extraversion) の次元である。神経症の傾向は、不安が二次的に条件づけられる主な動因の強さを決定し、内向性—外向性は二次的な動因と他の動因の条件づけの強さを決定する。そして、NE, SE, SI, NI の連続体をストレスに対する感受性の次元と考えている。

客観的に低い“外的”ストレス事態では、合成連続体 NE—NI の NI の端の個体は、すでに不安媒体の回避を開始している。なぜなら、このような反応の動機づけの内容は、この段階においてさえも、これらの個体にとっては、この回避行動を最大に働かせるほど十分に高いからである。しかし、同状況下において、連続体の NE の端の個体は、まだ、回避行動を開始しないだろう。他方、客観的に高いストレス事態では、NE の個体は今や強力な回避行動を開始するだろう。しかし、NI の個体は、今や、非常に強いストレスを受けているので、成功的な回避行動が分裂させられるであろう。

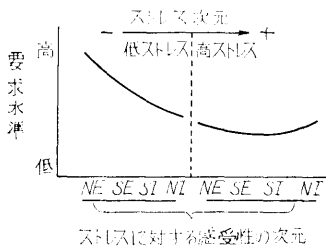


図6 要求水準に関する Inglis の仮説的曲線 (Inglis, 1960)²³⁾

Inglis は、このような動機づけの異常性と自我の働きという観点にたつて、要求水準に関して、図6に示されような仮説をたてているけれども、この曲線と媒体動機づけの関係については、詳しく述べられていない。

II. 問題および目的

先に述べたように、Inglis は、要求水準の問題を媒体動機づけ仮説によって統合しようとしたけれども、それは実験的に確かめられていない。従って要求水準に関するこの仮説の実験的検証には、一つの意義が認められる。しかし、Inglis の仮説を検討するまえに、先ず要求水準の測度の問題が明らかにされねばならない。

一般に、要求水準の測度として次のものが考えられている。(各々の意味に関して、歴史的概観の一部で触れたものに関しては説明を割愛する。)

- ① 目標差異得点 (G.D.)
- ② 判断差異得点 (J.D.)
- ③ 達成差異得点 Attainment discrepancy score (At.D.)

目標とその後の成績との差で、この値が正の場合は、目標の方がその後の成績よりも低く、負の場合は目標の方が高いことを示す。

- ④ 感情差異得点 (Af.D.)
- ⑤ 柔軟性指数 (F.I.)
- ⑥ 反応性指数 (R.I.)

これらの測度の主なものは Lewin (1944)²⁵⁾ によって提案された図に順じて次の図7に示される。

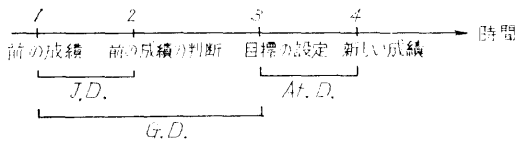


図7 要求水準の測度の図示

従来要求水準に関する実験において用いられた測度は、表5に示すように G.D. が最も多い。そして Frank の定義に従うと、G.D. を要求水準を測定する測度とみなすことができる。しかし、G.D., J.D., At.D., Af.D., F.I., R.I. はすべて要求水準をあらわす測度であって、G.D. が

最も適切に要求水準をあらわしているという根拠は明らかでない。

表5 要求水準の一般性の測度

実験者	年代と被験者	課題	測度	一般性		
				1. 二分割：一期間での一連の試行	2. テスト—再テスト：1つの実験期間対他の実験期間	3. 課題の種類に対する相関
Frank ¹⁰⁾	1935 36名の学生	印刷、輪投げ、空間関係	G. D.	—	0.26~0.75	0.37~0.62
Gould ¹⁴⁾	1939 82名の学生	同意語、類似語、たし算、記号—数字、抹消	平均得点	0.95~0.99	—	0.04~0.44
Gardner ¹²⁾	1939 31名の学生	カード分類、抹消、数字—記号、反対語	G. D.	—	—	0.38~0.70
Sears ³³⁾	1940 36名の子ども	読み、算数	G. D.	0.91~0.94	—	0.74

Hilgard and Sait ¹⁷⁾	1941 50名の学生	カード分類, 追跡学習	J. D. G. D. A. D.	0.49±0.11 0.71±0.07 0.86±0.04 0.95±0.02 0.86±0.04 0.09±0.07	— — —	0.46±0.11 0.66±0.08 0.60±0.09
Preston and Bayton ²⁹⁾	1941 60名のネグロ学生	記号—数字, 抹消 たし算	最大の現実評価と 最小評価	—	0.32~0.99	0.31~0.99
MacIntosh ²⁶⁾	1942 60名の学生	記号—数字, 抹消 たし算	最大の現実評価と 最小評価	—	-0.15~0.52	-0.09~0.79
Rotter ^{30, 31, 32)}	1942 205名(種々)	Aspiration board	G. D. 変動値	0.73~0.85 0.70~0.86	0.32 0.70} N=32	—
Rotter ²³⁾	1943 45名の学生	Aspiration board	G. D.	—	—	—
Himmelweit ¹⁸⁾	1947 40名の神経症	追跡計器, 数字— 記号	G. D.	—	—	0.25
Bills ⁵⁾	1953 30名の学生	矢投げ, 的, 抽出 置き換え, たし算	G. D.	—	—	-0.01~0.49
Harway ¹⁶⁾	1955 88名の学生	Aspiration board 水がめ問題, かく されたことばのテ スト	G. D.	—	—	0.14~0.46
Ausubel and Schiff ²³⁾	1955 50名の学生	読みの速さ, 算数 数字—記号, 尖筆 迷路	G. D.	0.54~0.89	—	0.38~0.71

従って、本実験の目的は、

- ① 要求水準に関する測度, G.D., J.D., At.D., Af.D., F.I., R.I. のうち, どの測度が最も適切に要求水準の測定をしているかを因子分析法によって明確にし(研究Ⅰ), しかるのちに,
- ② 要求水準に関する Inglis の媒体動機づけ仮説を検証すること(研究Ⅱ)である。

Ⅲ. 方 法

1. 被験者の選出

Inglis の仮説における人格の次元は, Eysenck によって考案された M.P.I. (Maudsley Personality Inventory) から, 因子分析によって求められた連続的人格型 NE, SE, SI, NI である。

この NE-NI 連続体と, Rosenzweig P-F Study の因子分析の結果得られた因子人格型との対応関係は一谷 (1966)²²⁾によって検証されている。すなわち, 表 6 のごとくである。従って, 本実験にお

表 6 M.P.I. と P-F 因子型との対応様式

Eysenck (1960) ²³⁾		一谷 (1966) ²²⁾	
NI	不安状態 (Anxiety State) 強迫神経症 (Obsessionals) 抑うつ性 (Depressive) 混合型 (Mixed State)	} ↔ {	I ⁺ (+00) (強迫型) III ⁻ (00-) (心気症型)
NE	精神病質 (Psychopaths) ヒステリクス (Hysteries)	} ↔ {	I ⁻ (-00) (妄想型) III ⁺ (00+) (ヒステリー型)
SI	正常的向性 (Introverted Normal)	↔	II ⁺ (0+0) (内罰型または内向性)
SE	正常的外向性 (Extraverted Normal)	↔	II ⁻ (0-0) (外罰型または外向性)

いては、NE-NI 連続体に相当するものとして、P-F Study からの因子人格型を適用することにした。

そこで、京都市立深草小学校 6 年生（当時 5 年生）、男女 209 名、および、京都市立板橋小学校 6 年生（当時 5 年生）、男女 151 名、合計 360 名に、P-F Study 児童用日本版を集団検査によって実施し、それを語義的解釈を遵守して採点した。その結果の因子得点化には、先に P-F Study の児童に関する因子分析²¹⁾によって出された因子得点表が適用された。各児童の P-F Study の 11 項目（E', E, e, I', I, i, M', M, m, E, I）および GCR の得点は、この因子得点表によって重みづけられた。

因子得点を求めたのち、各因子の極のいずれかについて比較的因子得点が顕著に出ているが（Z-

score が ±1.00 以上）他の因子の極については因子得点あまり顕著でない（Z-score が比較的ゼロに近い）者が被験者として選出された。しかし、実験に必要な人数をある程度獲得するために、相対的にみて、特定の因子の極の因子得点が高い者も被験者として選出した。また被験者の I.Q. は 80 以上に統制した。

この結果、選出された被験者は表 7 のごとくである。

表 7 各因子人格型の被験者数

M.P.I. 因子型	NE		SE S I		NI		計
	-00	00+	0-00	+0	+00	00-	
ストレス							
低ストレス事象	2	8	9	19	14	0	52
高ストレス事象	3	10	8	18	12	0	51
計	5	18	17	37	26	0	103

2. 実験材料

要求水準の実験における課題のもつべき要素は、Rotter (1942)³¹⁾、Eysenck (1947)⁹⁾ によって述べられている。それは次の通りである。

- ① 被験者が充分興味を持つような課題であること。従って、その課題は、難かしすぎたり、簡単すぎるものであってはならない。
- ② 得点の範囲が適当に広いこと。
- ③ 次回の成績が、大体予測できるものであること。
- ④ 被験者の得点は、実験者だけにわかり、被験者にはすぐにはっきりわからないようになっていくこと。
- ⑤ 練習効果が少ないものであること。

以上の条件を具えていて望ましいとされる課題には、Triple Tester や Punch Test があげられている。これらの課題以外でも、上に述べたような条件を満たすものとして、Penny in the slot とか Disc sorting が考えられる。従って、本実験では、これに準ずるものとして、Medal sorting を用いた。Medal の数は、各穴に 4 個あて、計 20 個とし、それを各穴に入れおわるまでの時間（秒）をその被験者の得点（速いほど高得点とする）とした。

3. 実験手続き

指示によって低ストレス・グループ（L.S.）と高ストレス・グループ（H.S.）に分け、各被験者は、個別で実験された。

（L.S. グループに対する指示）

“これからあなたにやってもらうのは、テストではありません。この作業がどれくらいの速さでできるかを学年毎に調査するだけです。だから、この結果はあなたの成績とは関係がないので気楽な気持ちでやって下さい。やり方は、このお皿の中からメダルを 1 つずつとって、この穴の中に入れて下さい。ここにあるメダルは、全部必ずどこかの穴にはいるようになっています。では、初め 3 回練習して調査に移ります。何か質問がありますか？では、練習を始めましょう。用意始め!!”

(H.S. グループに対する教示)

“これからあなたにやってもらうのは、知能テストです。この結果は、あなたの能力とみなされ、ほかの人と比較して担任の先生に報告します。だからあなたの成績に関係があるので全力を尽くしてやって下さい。やり方は、このお皿の中からメダルを1つずつとってこの穴の中へ入れて下さい。ここにあるメダルは全部必ずどこかの穴にはいるようになっています。では、初め3回練習してテストに移ります。何か質問は？では練習を始めましょう。用意始め!!”

グループ別に以上の教示が与えられ、3回の練習後、その試行に要した時間の中で、最も速かった時間が告げられ、しかるのちに、要求水準がたずねられた。

要求水準の意味は、教示によって次のようないくつかの相異が生ずるといわれている。

- ① 理想水準—“一番うまくいったらどれくらいできると思うか”
- ② 現実水準—“実際のところはどのくらいできると思うか”
- ③ 最低水準—“これだけは確実にできるところはどこか”
- ④ 期待水準—“どのくらいできると思うか”

一般に期待水準が要求水準とよばれ、この期待水準は理想水準に対応するできるだけ高い目標を設定しようとする傾向と、現実水準に対応する実際の成績にできるだけ近い目標を設定しようとする傾向と、最低水準に対応する失敗をできるだけ避けようとする傾向との3つの傾向の均衡の上に得られると考えられている。従って、本実験でも、期待水準をとり、“この次はどのくらいでできると思うか”とたずねた。そして、実際に作業をやらせ、“今のはどのくらいでできたと思うか”と被験者の自分の成績に対する判断を求めてから、実際に要した時間(秒)を知らせ、再び次の要求水準をたずねた。この手続きを10回くり返した。

IV. 研究 I 測度の検討—因子分析的接近—

1. 方法

各被験者について求められた要求水準の測度—G.D., J.D., At.D., Af.D., F.I., R.I.—は、L.S. グ

表8 L.S.グループにおける相関行列 (N=52)

	1 G.D.	2 J.D.	3 At.D.	4 Af.D.	5 F.I.	6 R.I.
1 G.D.	—	.402	-.688	.418	-.068	-.134
2 J.D.	.402	—	-.628	-.254	-.188	-.255
3 At.D.	-.688	-.628	—	-.051	.048	.220
4 Af.D.	.418	-.254	-.051	—	-.095	-.107
5 F.I.	-.068	-.188	.048	-.095	—	.584
6 R.I.	-.134	-.255	.220	-.107	.584	—

表9 H.S.グループにおける相関行列 (N=51)

	1 G.D.	2 J.D.	3 At.D.	4 Af.D.	5 F.I.	6 R.I.
1 G.D.	—	.473	-.781	.615	-.173	-.087
2 J.D.	.473	—	-.620	.002	-.154	.246
3 At.D.	-.781	-.620	—	-.627	.271	.017
4 Af.D.	.615	.002	-.627	—	-.075	-.085
5 F.I.	-.173	-.154	.271	-.075	—	.455
6 R.I.	-.087	.246	.017	-.085	.455	—

ループと H.S. グループの各グループ内で、それぞれの粗点の累積度数分布から正規分布曲線における比を求め、その比から T-score 計算表を用いて、T-score に換算された。そして、L.S. グループと H.S. グループにおいて各測度間の相関を求めた。

表8と表9に示される相関行列から、Thurstone (1947)³⁶⁾ の方法により、L.S. グループと H.S. グループについて因子分析が行なわれた。

相関行列から重心因子を抽出し、ここでは第3重心因子まで抽出された。その結果求められた重心因子行列は表10と表11に示される。これに、心理学的意味を正しく与えるための基準軸の直交転回を行ない、単純構造に改めて、最終的な転回行列を求めた。表12がそれである。

表10 L.S.グループにおける重心因子行列
(N=52)

	I ₀	II ₀	III ₀	h^2_j
1 G.D.	.728	.312	.437	.8183
2 J.D.	.561	.466	-.420	.7083
3 At.D.	-.705	-.519	-.027	.7671
4 Af.D.	.253	-.249	.515	.3912
5 F.I.	-.476	.499	.295	.5626
6 R.I.	-.572	.448	.267	.5992
$\sum a^2_{jt}$	1.9595	1.0956	.7916	3.8467
Contribution (%)	32.66%	18.26%	13.19%	64.11%

表11 H.S.グループにおける重心因子行列
(N=51)

	I ₀	II ₀	III ₀	h^2_j
1 G.D.	.837	.327	.202	.8483
2 J.D.	.467	.333	-.579	.6642
3 At.D.	-.890	-.372	.143	.9509
4 Af.D.	.584	.203	.465	.5985
5 F.I.	-.455	.538	.220	.5449
6 R.I.	-.245	.606	-.228	.4792
$\sum a^2_{jt}$	2.3189	1.0541	.7131	4.0860
Contribution (%)	38.65%	17.57%	11.89%	68.11%

表12 最終的な転回因子行列

測 度	群 因子	Lower Stress (L.S.) N=52				Higher Stress (H.S.) N=51			
		I ₂	II ₂	III ₂	h^2_j	I ₁	II ₂	III ₁	h^2_j
1. Goal Discrepancy (G.D.)		.886	.063	.169	.8175	.894	-.061	.209	.8466
2. Judgement Discrepancy (J.D.)		.543	-.053	-.640	.7073	.566	.031	-.585	.6635
3. Attainment Discrepancy (At.D.)		-.822	-.086	.285	.7643	-.962	.079	.136	.9501
4. Affective Discrepancy (Af.D.)		.279	-.127	.544	.3899	.613	-.033	.471	.5987
5. Flexibility Index (F.I.)		-.135	.733	.071	.5606	-.166	.703	.151	.5446
6. Responsiveness Index (R.I.)		-.248	.728	.080	.5979	.052	.625	-.292	.4786
$\sum a^2_{jt}$ (Variance)		1.9131	1.0976	.8268	3.8375	2.4511	.8968	.7343	4.0822
Contribution (%)		31.88%	18.29%	13.78%	63.96%	40.85%	14.95%	12.24%	68.04%

注 因子に付されている添え文字は、軸転回回数を示す。

2. 結果と考察

ここに求められた最終的な因子模様から、各因子について考察を進めてみよう。

○第I因子について

まず L.S. では、G.D., J.D. に正の負荷量が大きく、At.D. に負の負荷量が大きい。今、正の負荷量が大きいという点で、G.D. と J.D. との間には、何らかの共通点がうかがえる。つまり、G.D. は課題遂行前に被験者が“どれくらいできると思うか”という予測をたてることを意味し、J.D. は課題遂行後に“どれくらいできたと思うか”という予測をたてることを意味しているの、G.D., J.D. は各々、どれくらいできるかという期待するかということ、および、どれくらいできたかというこ

とであり、どちらも期待または予期 (expectancy or anticipation) が働いている点が共通であるので、この第 I 因子軸で正の方向に共通に負荷がもたらされたと考えられる。かくして第 I 因子軸は、目標への期待または予期に対する軸である。

このように、第 I 因子軸は、期待または予期という点で共通であるが、G.D. および J.D. が正に、At.D. が負に寄与して対極性を示している。これは、G.D. が G-P (目標-成績)、At.D. が P-G (成績-目標) として計算されたものであることから、これらの負荷量が、大きく正と負に分かれることは当然であって、G.D., J.D., At.D. は“期待 (または予期)”という点で共通で、それが正の方向に働くか、負の方向に働くかに関係がある。従って、G.D., J.D. がいくらできるであろうか、できたであろうかという期待であるのに対して、At.D. はいくらできないだろうという期待であると考えられる。

他方、H.S. では、正の方向の期待、G.D., J.D. に Af.D. が参考した形になっているが、これは、Af.D. が (G.D.-J.D.) として計算された結果もたらされたものであるので、G.D. と J.D. に対して共通の正の負荷を持つことが考えられる。ただ、L.S. と H.S. とで、At.D. が参与しなかったり、したりすることについては不明であるが、L.S., H.S. とともに G.D. が正に、At.D. が負に特に大きな負荷をもつことからみて、この因子の解釈は妥当と思われる。すなわち、G.D. と At.D. は期待を意味するという点で共通で、G.D. がプラスの期待を、At.D. がマイナスの期待を意味しているのであるが、プラスの期待というのは成功期待または成功予期をあらわし、マイナスの期待は失敗期待または失敗予期をあらわしていると考えられる。

○第 II 因子について

L.S., H.S. とともに F.I. と R.I. とに正の大きな負荷が寄与しており、負の負荷は認められない。今、正の負荷が F.I. と R.I. とに大きいということは、何らかの共通点を示唆するものである。つまり、F.I. は、課題遂行後の成績の変動に対して、目標がどれくらい変動するかという柔軟性 (flexibility) または可塑性 (plasticity) を意味し、R.I. は成功を経験したのちに目標を上げ、失敗を経験したのちに目標を下げるという柔軟性乃至可塑性のある一般的な反応の割合をほのめかしているのので、F.I. と R.I. とはどちらも、反応の柔軟性または可塑性が働いている点が共通である。従って、この第 II 因子軸で、F.I. と R.I. とが正の方向に共通に負荷がもたらされたと考えられる。かくして、第 II 因子は、目標設定への柔軟性、可塑性といえる。

○第 III 因子について

L.S., H.S. とともに、J.D. には負の負荷量が大きく、Af.D. には正の負荷量が大きくなっているが、J.D. と Af.D. に働いている共通点を探してみると、 $J.D. = J-P$, $Af.D. = G.D.-J.D. = (G-P)-(J-P) = G-J$ であって、J.D. と Af.D. とでは、判断 (J) が関与している点が共通であるといえるが、これは第 I 因子の期待に関する軸の場合とことなり、それとは独立なのであるから、期待また予期が関与していないとすれば、知覚的水準の判断の齟齬に関する軸ではないかと解せられる。

各因子は、上のように解されるのであるが、要求水準は、“与えられた課題における未来の達成の期待、または、目標”と定義されることから、第 I 因子に大きな負荷をもつものが要求水準の測度として適切であると考えられる。L.S. と H.S. とで一貫して第 I 因子に負荷が大きく寄与しているのは、G.D., J.D., At.D. である。しかし J.D. には、第 I 因子と同時に第 III 因子も働いているので、J.D. は純粹に期待だけの適切な測度とはなり難いことが想定される。そこで、第 I 因子のみに大きな負荷を有するものは G.D. と At.D. であるが、先に述べたように、G.D. がプラスの期待または成功期待を意味するのに対して、At.D. は、マイナスの期待または失敗期待 (失敗予期) を意味する。しかるに要求水準は、明らかにプラスの期待をあらわすものであるから、要求水準を測定するのは

G.D. である。

かくして、要求水準を最も適切に測定し得る測度は G.D. であり、他の測度は要求水準行動に付随的にあらわれる他の側面を測定するもので、本来的な意味における要求水準を測定するには適切でないものを含むといえる。

V. 研究Ⅱ —Inglis の仮説の検討—

研究Ⅰにおいて、要求水準を最も適切に測定している測度は、G.D. であることが示唆されたので、G.D. に関しての本実験結果に基づいて、Inglis の仮説を検討していきたい。

1. 方法

G.D. について Inglis の仮説を検討するまえに、まず、各被験者に最初に知らされた成績には、人格型および L.S., H.S. の条件によって差がないことが確かめられなければならない。そこで、L.S., H.S. の2条件下において、NE, SE, SI, NI の各人格型毎に、その被験者の3回の練習中最も良かった成績の平均が求められ（表13）、それに基づいた分散分析の結果が表14に示される。この結果は、各被験者に最初に告げられた成績には、人格型およびストレス条件によって有意差のないことを示している。そこで、各被験者について求められた G.D. の粗点は、L.S., H.S. の両グループを全体として研究Ⅰの場合と同様に T-score に換算された。そして、L.S. と H.S. の両条件下において各人格型の G.D. に関する T-score の平均が求められた。

表13 最初の成績（秒）の平均

人格型 条件	NE	SE	SI	NI
L.S.	63.0	65.4	64.9	60.3
H.S.	60.9	65.0	62.4	64.0

表14 表13に基づく分散分析

変 動 因	平方和	自由度	平均平方	F
人 格 型	157	3	52.33	0.4593
条 件	9	1	9.00	0.0790
交 互 作 用	167	3	55.67	0.4886
誤差（個体差）	10823	95	113.93	
全 体	11156	102		

（有意差なし）

表15 G.D.の平均

		NE	SE	SI	NI	全体
L.S. (N=52)	M	58.7	53.6	52.5	48.7	52.8
	σ	6.8	7.0	11.3	10.0	10.2
		E (Extravert)		I (Introvert)		
	M	56.3		50.9		
	σ	7.7		10.9		
H.S. (N=51)	M	47.2	46.9	47.8	50.3	48.1
	σ	7.0	11.1	7.1	11.3	8.9
		E		I		
	M	47.0		48.8		
	σ	8.8		9.1		

2. 結果

L.S. と H.S. における NE, SE, SI, NI, 個体および外向性 (extravert ; E), 内向性 (introvert ; I) の G.D. に関する T-score の平均は表15に示される。この表に基づいて、G.D. の平均を図示すると図8のごとくである。

これらの関係について統計的有意性の検定を分散分析法によって試みたのが表16である。この分散分析の結果は、人格型における G.D. 得点の間には有意な差を示さなかったが、L.S. と H.S. との2条件間には有意な差を示している ($F=6.312$, $P<0.01$)。また、人格型と2条件との間には交互作用のある傾向 ($F=2.036$, $0.10<P<0.25$) を示した。

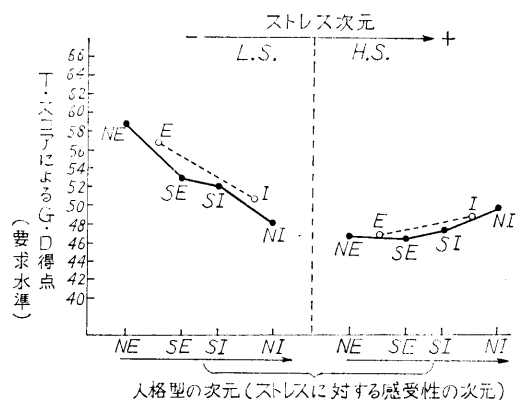


図8 G.D. の平均の図示

さらに、L.S. と H.S. の各条件について、夫々1要因の分散分析が行なわれたが、それは表17、および表18に示されている。この結果は、L.S. では、各人格型の G.D. 得点の間に有意差のある傾向 ($F=1.936$, $0.10 < P < 0.25$) を示したが、H.S. では、各人格型の G.D. 得点は有意差を示さなかった。

次に、L.S. と H.S. との両条件について、各人格型の相対的な差を検定するために、それぞれの G.D. の差に t-検定が行なわれた。また、同一人格型について、条件による G.D. の差が t-検定された。この結果は表19に示される。これは次のことを示している。まず、L.S. において、NE

表16 表15に基づく分散分析

変 動 因	平方和	自由度	平均平方	F
人 格 型	99	3	33.00	0.353
条 件	590	1	590.00	6.312**
交 互 作 用	571	3	190.33	2.036*
誤差 (個体差)	8881	95	93.48	
全 体	10141	102		

(** は $P < 0.01$, * は $0.10 < P < 0.25$)

表17 L.S. における分散分析

変 動 因	平方和	自由度	平均平方	F
級間 (人格型)	589	3	196.33	1.936*
級内 (個体差)	4867	48	101.40	
全 体	5456	51		

(* は $0.10 < P < 0.25$)

表18 H.S. における分散分析

変 動 因	平方和	自由度	平均平方	F
級間 (人格型)	81	3	27.00	0.316
級内 (個体差)	4014	47	85.40	
全 体	4095	50		

(有意差なし)

表19 G.D. 得点の差の t-検査 (その1)

条 件		L. S.				H. S.			
条 件	人格型	NE	SE	SI	NI	NE	SE	SI	NI
L. S.	NE	—							
	SE	1.522 .10 < p < .20	—						
	SI	1.533 .10 < p < .20	non	—					
	NI	3.448** .001 < p < .01	1.225 .20 < p < .30	non	—				
H. S.	NE	3.983** .001 < p < .01				—			
	SE		1.457 .10 < p < .20			non	—		
	SI			1.469 .10 < p < .20		non	non	—	
	NI				non	non	non	non	—

(** は 1%水準で有意, non は有意差なし)

と NI との間には G.D. の有意な差 ($0.001 < P < 0.01$) が認められるが、NE と SE、NE と SI は共に有意な差のある傾向 ($0.10 < P < 0.20$) を示した。また、H.S. では、各人格型の G.D. の間には有意差はみとめられなかった。すなわち、L.S. においては、NE の G.D. が最も高く、NI の G.D. が最も低く、SE と SI の G.D. はその中間に位置するのに対し、H.S. では、人格型のちがいにあまり関係なく、一貫して G.D. が低いことを示している。

さらに、NE は L.S. と H.S. とで、G.D. に有意な差 ($0.001 < P < 0.01$) を示し、SE、SI は有意に近い差 ($0.10 < P < 0.20$) を示したが、NI は有意な差を示さなかった。つまり、NE の G.D. は H.S. では有意に低くなり、SE、SI にもこの傾向があるが、NI の G.D. は条件によってかわりがなく L.S. でも H.S. でも低いことを示している。

表20は、L.S. と H.S. における外向性 **E** (extravert : NE と SE) 対内向性 **I** (introvert : NI と SI) の G.D. の差の t-検定、および、外向性と内向性について条件による G.D. の差の t-検定の結果を示している。この結果は、L.S. では **E** と **I** の G.D. の間に有意な差のある傾向 ($0.05 < P < 0.10$) を示すが、H.S. ではこの差は有意ではないことを示す。また、**E** は L.S. と H.S. での G.D. に有意な差 ($0.001 < P < 0.01$) を示すが、**I** は有意差を示さない。すなわち、L.S. では **E** は **I** よりも高い G.D. を示すが、H.S. では **E** と **I** とでは差がなく、ともに低い G.D. を示す。

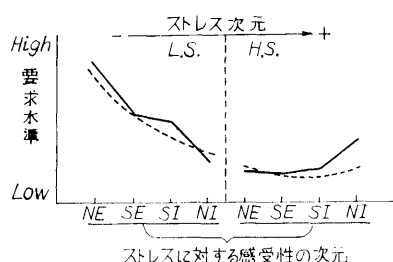


図9 イングリス (Inglis) の曲線と本実験結果との対応

表20 G.D.得点の差の t-検査 (その2)

条件	人格型	L. S.		H. S.	
		E	I	E	I
L. S.	E	—	—	—	—
	I	1.869 0.05—p—0.10	—	—	—
H. S.	E	3.444** 0.001—p—0.01	—	—	—
	I	—	non	non	—

(** は 1% 水準で有意, non は有意差なし, **E** は NE と SE の和, **I** は NI と SI の和を示す。)

3. 考 察

G.D. に関しての本実験結果は、Inglis の仮説した曲線とほぼ一致した。図9は Inglis の曲線と、本実験の結果とを対照したものである。

Inglis²³⁾ は、要求水準を不安との関連において説明しようとしたのであるが、要求水準、すなわち、G.D. は、未来への期待または予期を意味しているので、Inglis の仮説に従って考察する前に、まず、期待と不安との関係が明らかにされなければならない。このことは、Atkinson (1966)¹⁾ が、Achievement measure と Test Anxiety Questionair (T.A.Q.) によって、成功接近動因と失敗回避動因とを考え、Achievement が高く Test Anxiety が低い場合には、成功接近に強く動機づけられ、Achievement が低く Test Anxiety が高い場合には、失敗回避に強く動機づけられると考えていること、および、Raphelson (1957)¹⁾ が、Achievement と Test Anxiety との間に負の相関を報告していることから可能である。つまり、成功接近は“期待”または“予期”を、失敗回避は“不安”をあらわすと考えられるから、不安と期待の間には負の相関があり、不安が高い場合には、期待が低く、不安が低い場合には期待が高いと考えられる。従って不安との関係で要求水準を説明することは妥当である。

しかし、Inglis 自身、媒体動機づけ仮説に基づいた要求水準の説明については詳しく触れていないので、この仮説を推論して本実験結果を考察すると次のように考えられる。

まず、L.S. 事態では、合成連続体の NE—NI の NI の端の個体は、この事態ですでにストレスを敏感に感じとるので、不安に強く動機づけられ、不安を回避しようとするために低い G.D. つまり低い要求水準を示すのであろう。これに対して、NE の端の個体は、この事態ではまだストレスに影響されないで、不安に動機づけられていないから、期待がつよく働いて高い G.D. つまり高い要求水準を示すのだらう。そして、この事態では、ストレスを適度と感じとる SE, SI は、適度の不安に動機づけられるから、期待も幾分働き、彼らの要求水準は、適度に高く、NE よりも低くて、NI よりも高い、つまり NE と NI との中間に位置するのである。

他方、H.S. 事態において、NE 個体はやっとう不安に動機づけられ、不安を回避するようになるから、要求水準を低くたてるのであろう。また、この事態での NI 個体の不安はあまりに強すぎて適切な手がかり (relevant cue) を失ない、回避行動が破壊されるので要求水準はもっと複雑に決定されることになるであろう。そして、SE と SI の個体は、この H.S. 事態では、L.S. 事態におけるよりも強く不安に動機づけられるようになるから要求水準は低くなるのであろう。このように、H.S. 事態では、人格型にかかわらず、総じて低い要求水準を示すけれども、それは上述したような質的な違いがあると考えられる。

今、NE, SE, SI, NI 個体の要求水準の傾向をみると、(NE と SE) 対 (SI と NI), すなわち、Extravert 対 Introvert に大別できるようである。つまり、L.S. 事態では、一般に Extrovert の個体は Introvert の個体よりも要求水準が高く、H.S. 事態では Extrovert の個体も Introvert の個体もともに要求水準が低くなることが認められる。

かくして、本実験結果は Inglis の仮説を支持していた。すなわち、要求水準に関する Inglis の媒体動機づけ仮説の妥当性を示唆していると考えられる。

しかし、G.D. 以外の他の測度、J.D., At.D., Af.D., F.I., R.I. についても同様の手続きによって調べられた結果は、必ずしもこの仮説を支持するものではなかった。これは先に研究 I の因子分析的な研究でみたように、含まれる要因が複雑であったり、いわゆる要求水準以外の要因が関与したりする可能性が高いためと考えられるであろう。すなわち、G.D. 以外の測度が、未来の達成への期待または予期を測定する測度とはなっていないためであるということである。

従って、Inglis の媒体動機づけの仮説は、未来の達成への期待または予期を意味している G.D. に関しては妥当であるといえよう。

4. P-F 因子人格型と要求水準との関係について

本実験においては、合成連続体 NE—NI に対応する人格型として、P-F Study による因子人格型が適用されたので、P-F 因子人格型と要求水準 (G.D.) との関係について言及しよう。

まず L.S. 事態において、妄想型人格者 (I^- または -00 型)、ヒステリー型 (III^+ または $00+$ 型)、外罰型人格者 (II^- または $0-0$ 型) は、高い要求水準を示すが、強迫型人格者 (I^+ または $+00$ 型)、内罰型人格者 (II^+ または $0+0$ 型) は低い要求水準を示す傾向があり、特に妄想型、ヒステリー型人格者対強迫型人格者間には、有意な差があった。つまり、妄想型人格者は、自己の弱点を否定し、これを他者に投影 (projection) してまでも自我の確立を期そうとするから、高い要求水準を示し、また、ヒステリー型人格者は、他者から愛されたいという自己顯示欲求が強く、自分の不都合なことは抑圧し、失敗を無視するから要求水準は高い。これに対して、強迫型人格者は、自己の弱点、失敗等に対して、これを徹底的に是正することによって自我の確立を期そうとするから要求水準

は低いのだろう。

次に、外罰型人格者と内罰型人格者の要求水準の間には有意な差はみられなかったけれども、外罰型の人格者は自己反省心を欠き、自己の失敗を認めないので、高い要求水準を示すのに対して、内罰型人格者は、自責、自己批判的、内省的であるので、低い要求水準を示す傾向があると考えられる。心気症の人格者（III- または 00-型）については、被験者を選出することができなかったので考察外におく。

次に、H.S. 事態においては、ストレスが強くなるために、どの因子型人格者もすべて防衛機制が働いて、低い要求水準を示すようになると考えられる。

以上 P-F 因子人格者と要求水準との関係を簡単に述べてきたが、このように、P-F 因子型人格者を適用して、Inglis の仮説を実験的に検証し得たという観点に立つと、投影法 (Projective techniques) としての Rosenzweig P-F Study の因子分析から求められた因子人格型は、質問紙法 (Questionnaire method) としての Eysenck の M.P.I. によって測られた NE-NI と同様、個体の種々の性質について客観的に評価しているということができよう。

5. 本実験結果と他の研究との関連について

本実験結果の一般性を検討するために、人格要因と要求水準に関する従来の研究結果と本実験結果との関連について考察していく。

(1) Sears の実験結果との関連

Sears (1941)⁸⁴⁾ は、成功刺激と失敗刺激を与えて実験しているが、本実験では教示によって低ストレス事態と高ストレス事態とを区別し、失敗刺激と成功刺激はすべての被験者に与えられたので、Sears の実験場面は一応本実験に沿うと低ストレス事態であると考えられる。そこで本実験での低ストレス事態における結果との関連を考えてみる。

彼は非常に高い G.D. や非常に低い G.D. を示す者は、社会的に適応が悪く、緊張と不安とが高い人格者であるのに対して、適度に高い G.D. を示す者は適応の良い人格であることを明らかにしている。このことは本実験において、NE と NI とが、夫々高い G.D. と低い G.D. を示したことに相当する。従って本実験結果は、Sears の実験結果と一致しているといえるだろう。

(2) Cohen の実験結果との関連

Cohen (1954)⁸⁾ の実験も一応低ストレス事態での実験であると考えられる。

彼は非常に高い G.D. と非常に低い G.D. とは、自己拒否または自己廃棄 (self-rejection) の高い程度に関連づけられ、中間の G.D. は自己受容 (self-acceptance) に関連づけられることを示している。彼がロールシャッハ・テストから得た人格変数であるところの、self-rejection および self-acceptance の程度が、本実験での NE-NI 個体にどのように結びつくかが問題であるので、彼の実験結果との関連については今後の研究を要するが、推測的には、self-rejection が N の次元に相当し、self-acceptance が S の次元に相当するであろうと考えられるので、そうした前提に立脚するときには、本実験の結果は、一応 Cohen の結果とも対応すると考えてよからう。

(3) Eysenck および Himmelweit の実験結果との関連について

Eysenck (1947)⁹⁾ や Himmelweit (1947)¹⁸⁾ の実験では、テストが課されるまえに、“このテストでの最高得点は〇点です”という教示が与えられているので、この実験場面は、高ストレス事態と考えられる。そこで、本実験での高ストレス事態における結果との関連を考えてみる。

Eysenck と Himmelweit は、NE 個体の典型としてヒステリックス、NI 個体の典型としてディスミックスを被験者に選んだ。そして、ディスミックスの G.D. は、ヒステリックスの G.D. よ

りも有意に高いことを見出している。しかるに、本実験では高ストレス事態において、NE, NI の個体の間に有意差はなかったが表15にみるように、NE—NI の連続体について、NE=47.2, SE=46.9, SI=47.8, NI=50.3 という結果をみており、わずかではあるが NE よりも NI の方が要求水準 (G.D.) が高いという結果を示しているので、一応 Eysenck や Himmelweit のものと対応するといえる。Eysenck や Himmelweit のように、有意な差が NE と NI との間にみられなかった理由については次のように考える。すなわち、この有意差が出るか出ないかの違いは、ストレスの与え方の違いに依存するものであらうと考える。つまり、本実験では、“これからやるのは知能検査です。…” というように、かなり強いストレスであったのに対して、Eysenck や Himmelweit の実験では、“このテストの可能な最高得点は〇点です。…” というようにストレスのかかり方が弱いので、このようなストレスの与え方の違いが、異った実験結果をもたらしたのではないかと考える。

VI. 結 論 と 要 約

要求水準は常に一定に保たれるのではなく、成功・失敗経験、準拠尺度、社会的要因等の環境要因によって影響され、その時々によって変化するし、また、個体差という人格要因によっても要求水準には違いが見られる。これらの諸要因と要求水準に関して、幾多の研究がなされてきたが、James Inglis は、環境要因（主としてストレスの高低）および人格要因と要求水準との関係において、要求水準の問題を媒体動機づけ仮説 (Mediation Motivation Hypothesis) によって統合しようとした。彼は、環境要因として、ストレス次元を、人格要因として、ストレスに対する感受性の次元を考え、Eysenck の神経症的傾向 (neuroticism) と、内向性—外向性 (introversion-extraversion) の次元に基づいた NE, SE, SI, NI 連続体を設定して、これらと要求水準との関係について仮説した。

また、要求水準の測度としては、一般に、G.D., J.D., At.D., Af.D., F.I., R.I. が考えられるが、従来の研究では、G.D. が最も多く用いられた。しかし、これに対する妥当性は明らかでなかった。そこで、本実験は、要求水準に関する測度の妥当性を確認する目的とともに、Inglis の媒体動機づけ仮説を検証する目的で計画された。本実験では、NE—NI 連続体との対応が認められている P-F 因子型人格者児童が適用された。

本実験結果から次のことを結論し得る。すなわち、

- ① 要求水準に関する測度を因子分析した結果、要求水準を測定する測度は G.D. が最も適切である。
- ② G.D. に関しての本実験結果は Inglis の仮説を支持した。すなわち、低ストレス事態では、NE—NI 連続体に沿って要求水準は低くなり、ストレス事態では、人格型の違いに関係なく、すべて低い要求水準を示した。かくして、不安の動機づけによって、要求水準が決定されるという Inglis の媒体動機づけ仮説には妥当性が認められた。しかし、他の測度、J.D., At.D., Af.D., F.I., R.I. については必ずしもこの仮説は支持されなかった。
- ③ 投影法としての P-F Study は、M.P.I. のような質問紙法と同様、学習行動場面の性質を客観的にとらえることができるといえる。

以上のごとくであるが、本実験では、実験材料の性質上、要求水準は時間（秒）であらわされたので、各被験者の I.Q. は統制しているけれども、時間判断に関する個人差がこの場合の G.D. には影響する可能性が考えられるかもしれない。従って、本実験での G.D. に関する結果は、Inglis の仮説を支持していたけれども、時間判断の個人差に左右されない場合の G.D. に関しても、同様に Inglis の仮説が支持されるかどうかを検討されなければならないだろう。

参 考 文 献

- 1) Atkinson, J. W. and Feather, N. T. (ed.) (1966) A theory of achievement motivation. New York: John Wiley and Sons.
- 2) Ax, A. F. (1947) A validation study of the Rotter-Jensen level of aspiration test. *J. Personality*, 15, 166-172.
- 3) Bayton, J. A. and Whyte, Esther C. (1950) Personality dynamics during success-failure sequences. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 45, 583-591.
- 4) Berlyne, D. E. (1954) Knowledge and stimulus-response psychology. *Psychol. Rev.*, 61, 245-254.
- 5) Bills, R. E. (1953) A comparison of scores on the index of adjustment and values with behavior in level-of-aspiration tasks. *J. cons. Psychol.*, 17, 206-212.
- 6) Brown, J. S. (1953) Problems presented by the concept of acquired drives. In *Current theory and research in motivation : a symposium*. Lincoln : Univ. of Nebraska Press.
- 7) Chapman, D. W. and Volkman, J. (1939) A social determinant of level of aspiration. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 34, 225-238.
- 8) Cohen, L. D. (1954) Level of aspiration behavior and feelings of adequacy and self-acceptance. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 49, 84-86.
- 9) Eysenck, H. J. (1947) Dimensions of personality. London : Routledge and Kegan Paul.
- 10) Frank, J. D. (1935a) Individual differences in certain aspects of the level of aspiration, *Amer. J. Psychol.*, 47, 119-128.
- 11) Frank, J. D. (1935b) Some psychological determinants of the level of aspiration. *Amer. J. Psychol.*, 47, 285-293.
- 12) Gardner, J. W. (1939) Level of aspiration in response to a pre-arranged sequence of scores. *J. exp. Psychol.*, 25, 601-621.
- 13) Gilinsky, Alberta S. (1949) Relative self-estimate and the level of aspiration. *J. exp. Psychol.*, 39, 256-259.
- 14) Gould, Rosaland. (1939) An experimental analysis of "level of aspiration." *Genet. Psychol. Monogr.*, 21, 1-116.
- 15) Gould, Rosaland. (1941) Some sociological determinants of goal striving. *J. soc. Psychol.*, 13, 461-473.
- 16) Harway, N. I. (1955) Einstellung effect and goal-setting behavior. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 50, 339-342.
- 17) Hilgard, E. R. and Sait. E. M. (1941) Estimates of past and future performances as measures of aspiration. *Amer. J. Psychol.*, 54, 102-108.
- 18) Himmelweit, Hilde T. (1947) A comparative study of the level of aspiration of normal and neurotic persons. *Brit. J. Psychol.*, 37, 41-59.
- 19) Holt, R. R. (1946) Level of aspiration : ambition or defense? *J. exp. Psychol.*, 36, 398-416.
- 20) Hoppe, F. (1930) Erfolg und Misserfolg. *Psychol. Forsch.*, 14, 1-62.
- 21) 一谷 彊 (1964) 人格の因子分析的・実験的に臨床的研究—Rosenzweig P-F Study とその人格理論を中心として—：正常児群の因子分析 京都学芸大学紀要 Ser. A, No. 25, 45-60.
- 22) 一谷 彊 (1966) 人格の因子分析的・実験的に臨床的研究—Rosenzweig P-F Study とその人格理論を中心として—：因子型と M.P.I. との関係 京都学芸大学紀要 Ser. A, No. 28, 1-10.
- 23) Inglis, J. (1960) Abnormalities of motivation and "ego-functions". In H. J. Eysenck (ed.) *Handbook of abnormal psychology*. New York : Pitman Medical Publishing, Ch. 7, 262-297.
- 24) Lewin, K. (1935) A dynamic theory of personality. New York : McGraw-Hill. 相良守次・小川隆

(訳) パーソナリティの力学説 東京 岩波書店 1963 (5th ed.)

- 25) Lewin, K., Dembo, Tamara, Festinger, L. and Sears, Pauline S. (1944) Level of aspiration. In J. McV. Hunt (ed.) *Personality and the behavior disorders*. New York : Ronald Press.
- 26) MacIntosh, A. (1942) Differential effect of the status of the competing group upon levels of aspiration. *Amer. J. Psychol.*, 55, 546-554.
- 27) Morris, C. (1946) *Signs, language and behavior*. New York : Pentice-Hall Inc.
- 28) Osgood, C. E. (1952) The nature and measurement of meaning. *Psychol. Bull.*, 49, 197-237.
- 29) Preston, M. G. and Bayton, J. A. (1941) Differential effect of a social variable upon three levels of aspiration. *J. exp. Psychol.*, 29, 351-369.
- 30) Rotter, J. B. (1942a) Level of aspiration as a method of studying personality : I. A critical review of methodology. *Psychol. Rev.*, 49, 463-474.
- 31) Rotter, J. B. (1942b) Level of aspiration as a method of studying personality : II. Development and evaluation of a controlled method. *J. exp. Psychol.*, 31, 410-421.
- 32) Rotter, J. B. (1942c) Level of aspiration as a method of studying personality : III. Group validity studies. *Character and Pers.*, 11, 254-274.
- 33) Sears, Pauline S. (1940) Levels of aspiration in academically successful and unsuccessful children. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 35, 498-536.
- 34) Sears, Pauline S. (1941) Levels of aspiration in relation to some variables of personality : clinical studies. *J. soc. Psychol.* 14, 311-336.
- 35) Steisel, I. M. and Cohen, B. D. (1951) The effects of two degrees of failure on level of aspiration and performance. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 46, 79-82.
- 36) Thurstone, L. L. (1947) *Multiple-factor analysis*. Chicago : Univ. of Chicago Press.

Summary

Several measures have been used for measuring the level of aspiration. Among them are goal discrepancy (G.D.), judgement discrepancy (J.D.), attainment discrepancy (At.D.), affective discrepancy (Af.D.), index of flexibility (F.I.), and index of responsiveness (R.I.). However, which measure is the most suitable one for measuring the level of aspiration? For this purpose, the six measures were analyzed by Thurstone's multiple-factor method.

Three factors were extracted. They were (i) expectancy (or anticipation) of goal (or success), (ii) flexibility of response, and (iii) time judgement (or time perception). It was found that the goal discrepancy was a relatively suitable measure for the level of aspiration. The goal discrepancy loaded positively and highly on the factor of "expectancy".

Thus the goal discrepancy score was used to examine Inglis' Mediation-Motivation Hypothesis of the level of aspiration. In the factor analysis of the measures for the level of aspiration, 103 sixth-grade children were used as the subjects. The same subjects were also used for testing Inglis' Hypothesis. Using the goal discrepancy scores of the medital sorting test, Inglis' Hypothesis was, in both high and low stress situations, supported with considerable positiveness.

It was also found that the results obtained in this study had positive relations to the results so far gained by the most investigators.